

# 「誇りと使命感をもって……」と叫んだ社長の一言に拍手を送ります。

## タクシー乗務員が短命と言われる本当の理由

「短命と言われる乗務員の皆さん、こんにちは……」冒頭で静岡県タクシー協会西部会の久野会長は、来場者400名にこう挨拶した。3年前に卒煙した彼からの、タクシー乗務員と禁煙へ導こうとするコメントだった。

「今日を境に、皆さんが禁煙できるようにこの会を企画しました」という慈愛に満ち、毅然としたメッセージに会場は静まり返った。

静岡県タクシー協会と個人タクシー協会は8月5日の「タクシーの日」から、計6100台の全車禁煙に踏みきった。全国で4番目の快挙である。大分県、名古屋市、神奈川県、長野県と続いたこの現象は、ドミノ倒しのように全国に波及している。

浜松市タクシー協会から小生に与えられた講演テーマは「乗務員の禁煙化」であり、「禁煙タクシーについて」ではなかった。

特に喫煙率の高い乗務員の口か

ら、「繁華街でのトラブル」「売りに上げ低下」などの不安材料が経営陣に伝われば、二の足を踏むことは当然である。この業界でも「不可解な無理解」が跋扈していたのだ。その間、能動喫煙や受動喫煙による健康被害は確実に忍び寄り、乗務員の平均寿命は70歳に満たないのである。

折角の講演会を実りあるものにするために、当地の政財界・教育界やマスコミにも情報提供した。

講演会はI部「禁煙タクシーは時代の要請」、II部「禁煙タクシーの普及のさせ方」の2部構成とし、喫煙規制の進んだ欧米の動画映像を提示し、わが国では喫煙の有害性が意図的に伏せられている現状を伝えた。特に、慢性肺気腫で亡くなった男性からのメッセージには、大勢からの共感を得て、会場内の雰囲気を変えた。

また、小生は喫煙時の劣悪な車内環境が、単にニオイによる迷惑ではなくて、甚大なる悪影響を乗客・乗務員に与えている事実を示した。具体的には、10万人当たりの生涯リス

クを肺がん死亡に導き、①アスベスト曝露は10名、②乗客からの受動喫煙は1000名、③本人の能動喫煙は2万名、という明白な統計数値を伝えた。衝撃的な事実を目の当たりにした乗務員の驚きは、どれ程のものであったろう。

講演前は賑わっていた屋外喫煙所も、講演後は閑散としていたことからも、彼らに「気づき」が芽生えたことが窺える。

## 紆余曲折を経て船出した禁煙タクシーの前途

II部の討論会では、遠鉄タクシーの小高社長が、これまでの15ヵ月間の実績を示しながら、「誇りと使命感を持って取り組もう！」と呼びかけた。また、首都圏からは2003年に全車禁煙を達成した大森交通の郭社長が、「乗務員の受動喫煙防止の視点こそが大切」とのコメント。一社単独での禁煙車導入の苦労話もされた。

更に、禁煙タクシー第1号の安井氏は、これまでの孤軍奮闘してきた

## ●その時、歴史は動いた——浜松市タクシー協会の 取り組み 加藤一晴 日本禁煙学会・評議員 浜名医師会理事

永年にわたる話題を切々と話し、会場の共感を博した。「タクシー全面禁煙をめざす会」タクシー乗務員の平田氏からは、「全車禁煙だと協力してもらえない」と自信を持つようなメッセージを頂戴した。そして、「タクシー全面禁煙は乗務員の人権宣言」と結んだ。

その後、会場を埋め尽くす群集との間違まちがなやり取りが、繰り上げられ、当初の予定時間を遙かに超えることとなった。特に医学的な見地からだけではなく、導入後のノウハウなどの「現場の肉声」は、来場者にインパクトを与えた。

「時代の要請」だけでは、導入後の隠れ喫煙が横行するのは、多くの例が示している。先行導入した都市で取材した時「夜間のトラブルは、100件の内1件くらいかなあ……」とくわえタバコで乗務員が答えていた。

彼には「危機感」が伝わっていなかった。そのため、乗務員ひとりひとりへのボトムアップの大切さを痛感していた。今回の企画は、まさに



2部のシンポジウム。右から遠鉄タクシーの小高社長、大森交通の郭社長、禁煙タクシー第一号の安井幸一氏、タクシー全面禁煙をめざす会の平田信夫氏、筆者、総合司会の原田靖子さん。

それであった。こども達と違い、自己判断ができていく大人への意識・行動変容は難しい。しかし、その判断が確なものなのか、世界の認識との乖離乖離はあるのかを伝えることは、難しいものではない。大切なのは、包括的に明日以降の喫煙者の身体を思いやる気持なのである。

乗務員ひとりひとりに、有効な「気づき」が得られれば、タクシー空間は大変な快適環境に豹変ひょうへんする。新車の二オイは、1年後も継続することは立証済みである。

経営陣が必要性を理解・納得し、トップダウンしても、現場の乗務員

が認識していなければ形骸化けいがいし、「何ちゃって禁煙タクシー」と揶揄やゆしたものになるであろう。これは遅すぎた「乗客&乗務員の環境問題」なのである。

産声を上げたばかりの禁煙タクシーに、あれこれ苦情を言うのは簡単である。実際に、名古屋でも、神奈川でもそれに近い新聞記事が散見された。そのため、乗務員ひとりひとりが、「タクシー禁煙化の理由」を理解し、毅然とした対応をすることが肝心だ。

禁煙タクシーは紆余曲折うよくせつの後、船出を迎えた。利用者は称え、育みながら見守る視点こそ要求される。このような企画が全国的に拡がれば、禁煙タクシーの普及は難しくない。

今回、浜松市タクシー協会は、その貴重な「礎いしづえ」を築き、歴史の一端を担うことができた。それには関係者が一致団結し、遺憾なく遠州浜松の「やらまいか精神」を発揮してくれたからこそなのである。今後、追従者が出てくることを切に望みたい。